

氏名	石井理絵
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第280号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉カナデルYAMAJIORIMONO * WORKS 2006～ 〈論文〉行為と場所の哲学 変化する現在－航跡へYAMAJIORIMONO * WORKSの実践から
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 木幡和枝
（論文第1副査）	〃 〃（〃） 渡辺好明
（作品第1副査）	〃 〃（〃） たほりつこ
（副査）	琉球大学 講師 上村豊

（論文内容の要旨）

私は、群馬県桐生市にある元織物工場にて、工場主ともうひとりの美術家との三者でともに行なう諸活動により、「場所」と人にまつわる思考を進めている。（YAMAJIORIMONO\*WORKS 2006～ 山崎裕之・西村雄輔・石井理絵）

その場所は個人の工場で、地域を象徴する産業（近代工業としての織物業）が戦後頃から昭和の終わりまで営まれていた。歴史的・共同体的な背景をもち、かつ、個人の生活と記憶に密接に結ばれていた場所である。工場停止後、人の恒常的な営みが離れて久しいその場所に、手を入れようとするとき、人はどのようにしてその場所を経験するのだろうか。本論考は、その活動——かつて生活や家業を営んでいた場所を中長期の凍結の後にふたたび手繰り寄せようとする工場主と、ともに行なうし、創りあげていく場所と人との直接の関係について、行為者として、実践を基盤とした考察を行なうものである。

序章にて、まず前置きとして「人がかつて産業を営んでいた場所」への社会的な視線について、「（産業/近代化）遺産」、そして遊休地という概念、それらにまつわるまちづくりや建築・保存、また美術といった立場からの昨今の試みに触れる。しかしいずれの立場からであっても、実際の行為の現場であらわになる問題は概観する以上に個別の複雑さを孕み、それを前にしては、どの分野も等しく真摯に在るほかない。

その上で、I章を「YAMAJIORIMONO\*WORKS」と題し、固有の場所と人との邂逅から活動へ至る経緯と概要を述べることから論を始める。その場所の所在する地域的状況を知り、地域のかつての主産業について人々が共通して持っている悲喜交々の記憶について、遊休地が廃墟化へ向かう過程にある実情と合わせ確認する。それはしかし、その後に述べる〈個々の物語〉の可能性——他ならぬ本人によって、滞留する諸問題（建造物、記憶、物、etc, ...）に根本から取り組むことができる可能性について、より具体的な背景を基に述べるためである。

対象の場所は「場所」であって、建物のみでも人のみでも、まして地名や区画という概念のみでは成り立たない。それは実存する空間として、個々の人間の経験と不可分な「生きられた空間」である。私たちは、かつて営まれていた工場を止めて以後その状態のままに時間が経過し停止した場所に、あらためて入り、もう一度意識を向け、手をかけることで、離れかけたものを手繰り寄せる。人を含むその場所が、ふたたび息することを意識し、動く。場所の具体的な将来の利用法を定めてそれに向かう方法を

とらず、あくまで日常的な営みの延長として、場に必要な行為を見出し、行なう。そうして、いま、中断の期間のうちに固まった土を耕すように、どんなささやかなものでも主体としての営みが生まれるような土壌をつくっている。

そのように取り組む際、つまり人が実際に或る場所の世界／環境を改変する際に必要なのが、その行為者がどのように場所を「読む＝知る」のかということである。Ⅱ章では、人が場所をどのように解読するのかについて、整理する。そのなかで特に意識されるものを「詩的解読（瞬間性）」、「歴史的・地域的解読」、「身体的解読 — 更新していく概念」としてそれぞれ説明する。

これを受けてⅢ章では、Ⅱ章で示した、人が場所を読むときに重要な要素となる「痕跡」について、その時間性や人の視線との関係を検討した上で、生ける存在たちは常に変化する現在にあるもの、として意識するときの痕跡の在り方について考察する。痕跡を、時間の止まった過去を示すものとしてではなく、現在の時間の下でなおうごめく《航跡》としてとらえる視点を提示する。

さらにⅣ章にて行為の場所への作用、また行為が行為者自身にもたらす作用について、具体的な行為の記述を通して考察し、加えて或る行為の最中に意志とは関係なくかさねて体験される事柄の記憶について、意識を拡げる。

そしておわりに、活動の現場において現れつつある人の行為の日常性とその力、姿を見せようとしているものの存在について示唆し、論を閉じる。

人間の営みが遺したものであり、かつて「生きられた空間」であるその場所が、完全に過去として切り離される前に、同じ人 — かつてそこを生きた人、を含む手によって、再び《生きる場所》へと向かうこと。私たちの活動がまさにいま行なっていることは、そのようなことであると言える。ある場所における個体的な特徴や事象と、地域に共有された普遍的状況との狭間で行なうことになった行為。行為者として当事者である立場から、行為する身体の内からの認識にたたく、さなかに培った思考をできるかぎり直観的認識に留意する方法で記す。場所の、目に見える変化だけでなく、行為者自身の直観を意識することは、場所を構成するひとりの人間としての、そして表現者たらんとする私たちの特性であり、また義務でもある。

#### (博士論文審査結果の要旨)

石井理絵「行為と場所の哲学 変化する現在—航跡へ YAMAJIORIMONO\*WORKSの実践から」は、筆者がとある町を舞台にした美術展に参加したことがきっかけで巡りあった、織物工場とその場を舞台にしたさまざまな考察と実践を総括した論文である。その“場”との邂逅や、現在進行形での関わりについて仔細にまた繊細に論考が重ねられる。近代と現代の挟間に佇む、時間を停止させた（人が手をかける事を止めた）場所が、改めて《生きる場所》へ向かうためにいかに関わるか、という根源的な美術家としての主体と場の問題。それは当事者としての工場主と、筆者と共同作業者という三者の関係、それぞれの行為がお互いに反映し全てが並列な行為者、“主体”として工場という“場”を再構築する“行為”へと生成する。その時間の記録であり論考である。またこの行為は昨今の地域と芸術の事例のように、地域の当事者から召喚され共同者として芸術家が主体的な活動をする例とも距離を置き、地域や場所と芸術家の協働についての新たな可能性について視座を広げる。織物工場の消滅と新たな生成。不可視の空気に形を読み、人の記憶や希望、不安といった心の表象としての空間に、作り上げる事ではなく考え寄り添う事を主体とした行為。その行為は場所を変化させ同時に行為する者たち自身を変化させた。積極的な介入ではなく、鋭敏な、言わば三者それぞれの受動的感応は、連歌的詩作をも連想させる。磨き上げられ黒光りする油がしみ込んだ床は、いかにも甲板のようでもある。YAMAJIORIMONO\*WORKSは如何なる時も更新することを厭わない確かな羅針盤を得、その痕跡は新たな時代に向けて新たな航跡を生むだろ

う。そんな期待を抱かせる優れた論文になった。

(作品審査結果の要旨)

本作品は、一時期は時代を牽引した産業が衰退後、アートによる再生への試みが10年以上続く町での現在進行形の実践現場を申請者の視点から提示している。3年余の実践は、もう一人の作家と共に、残された織物工場の工場主との出会い、その3名が、当時の痕跡をもつ工場跡で織機と建物の一部を解体する行為の時間を共有する中から生み出された作品である。そのプロセスは、過去の出来事の「当事者」—申請者がいう歴史の襞にいる「沈黙する個人」である工場主の心に住まう記憶の場所—「生きられた場所」を数年間をかけ、緩やかに現在に「生きる場所」へと変容させる、密やかな個人的な行為である。その現場で共に行為をすすめ、現在の出来事として共有する「共同者」の一人となった申請者は、同時に写真や映像を撮影し、数多くのテキストを残した。過去の出来事そのものの不在の中で痕跡が航跡となり更新される場所への身体的解釈は、無意識に近い日常の繊細にふるえるように生まれる人生への問い、人のほんとうの幸せとは何かを問う。

本作品はテキスト、映像、現地の壁を想起させる壁面、時折、聞こえる電車の音からなる。映像は取り除いた壁面に架けられたシートの上を動く陽の光、そして、現場の部屋にある窓。開け放たれた窓には塀の向こうに明るい庭の緑がみえる。テキストは和紙に手書きでトンボの羽のように集められて壁面に採集されている。

申請者が産業や町の歴史を背景に、すでに語られた言説やイメージ、また、現場を離れて行為を語る手法から逃れ、行為がおこなわれた工場跡の部屋を申請者の視点から表現した「風景」といえる。工場跡での時間を喚起させるものである。黒く染み込んだ油の匂いが立ち籠める部屋に流れ込む風を感じさせる。密やかな航跡の風景は未だ不在の生まれくるものへの期待を抱かせる優れた作品となった。

(総合審査結果の要旨)

1980年代半ばから日本でも、大都市圏ではなく地方において、都会からの観客（参加者）を交えた一般市民を対象として開催されるアート・イベントが出現しはじめた。自治体なり有志団体なりが芸術家を招聘して、あるいは都市から出向いた芸術家集団がみずから地域に拠点をおき、地元と協力して美術、音楽、舞踊などのプロジェクト、フェスティバル、あるいはトリエンナーレなどが毎年あるいは定期的で開催されるようになった。現在に至る経緯をたどれば、瀬戸内海地域の牛窓から直島へ、山梨県の白州町、新潟県の妻有地域など、今も継続する地方における現代アートの定期的な主要イベントの萌芽はその頃から始まっていた。

これは70年代からフランス、ドイツなどヨーロッパ先進諸国において文化行政の力点が地方への拡散に力点を置くようになったことに十年のずれをへて起った動きである。第二次世界大戦終結後30年をへて、復興から経済成長、そして産業の再編成を模索する先進諸国においては、程度の差こそあれ、経済文化の大都会における一極集中を解消し、文化イベントを地方経済の活性化に結びつけ、中央と周縁地域の経済、文化、教育の格差を是正することが必須の課題となったことの必然的現れだった。

そんななかで、東京首都圏からそう遠くない群馬県桐生市において、伝統的な織物産業の衰退にともない、閉鎖された工場などを再利用して芸術活動を受け入れ、地域の経済と文化、人々の営みを活性化する動きとして90年代に始まった動き、後に「桐生再演」として定着する運動の中から生まれた研究が本論文の骨子となっている。この運動には当初から東京芸術大学美術学部の学生、教員などが関わっていたため、いずれ書かれるべき論考として本論文があったことは言うまでもない。

著者の石井理絵は美学と詩学を専攻し、修士課程ではさらに造形や映像の技法を身につけ、本研究・論文・作品にいたる博士課程後期においては、それらの総合としての研究をものした。つまり、美学、言語表現、造形表現に傾注して、具体的な共同体、場所、時間、社会活動、生命活動を観察し、そこへ身を投じ、それでいてなおも客観性と主体性とをあざなえる縄のように布置して、美術家による研究として特筆すべき独自の眼差しをもつ論考を成就した。この点は主査・副査一同が格別に評価している点である。

産業構造の変遷に伴う共同体の物心両面における変化と、それへの対処としての地域の再生をめぐっては、近年、都市工学、経済学、社会学をはじめ様々な分野で研究がなされ、公共事業として、あるいは産業活性化プロジェクトとして実際に多数の官民の試みがなされてきた。また、過去の遺産ないしは遺物としての建築・建造物（工場、学校、港湾施設など）や場所（田畑、広場、共有空間）の再利用や再生の具体例も枚挙のいとまもない。より具体的には、大中小の都会の旧市街に繁栄した従来の商店街や都心の空洞化（いわゆるシャッター街）対策や、建築や環境の分野における古民家保存・再利用をめぐる研究も多数行われている。

石井論文・作品の特色は、上記の多くのものがともすれば機能、生産性、実効性を目指しての研究であったり事業であったりするのに対し、具体的な場所や主体者に照準を合わせた研究・制作であることだ。つまり、行政面での「対策」に取り組む前提となる人の「心」、共同体の基盤となる「絆」「価値感」といった形のないテーマに取り組み、社会学、経済学、産業研究、都市工学などを補完して、「心」の移ろいと再生を形に、言葉にする試みであり、これは芸術分野が他の学術分野に対して大きな貢献を果たしうる発見と契機をはらんでいる。

論文、作品それぞれの要点と価値は各副査の審査結果要旨にまとめられているが、一点、以下を本研究の比類なき価値として強調しておく。ここには、文化芸術の表現をめぐる主体と客体、また共同基盤をめぐり、ことが非定形で感性的な面が大きいと、ながらく言語化の試みから置き去りにされてきたテーマと真っ正面から取り組む姿勢が貫かれている。地域に身を置き、地元と共同で作業をするアーティストをめぐり、論文では以下の諸点が生硬なまでに緻密に観察され、掘り下げられ、精査されている。地元とアーティストが場所の貸し主／借り主という関係から、「共同者」へと変質して行った過程。「場所」における、場所に対する「行為者」と「当事者」という主体の関係、そしてさらに「共同者」という新たな存在とその倫理的規範。

つまり本研究は、先述のような「地域におけるアート・プロジェクト」に外部から参加するアーティストの主体に関する、ある種循環的な自問の記録（ドキュメント）であるとも言える。柔軟に自我の殻を変形させて行く（それより他にない）主体の成り立ち方である。行為に先立つ主体ではなく、まず行為があつて、その作用によって生まれた変化や差異こそが主体を成り立たせている。これは認知心理学（生態心理学）でいうアフォーダンスの概念を、具体的な行為に適用したものであるが、この学際的な文脈で重要な面は、著者の目的が、この概念の建築・デザインの観点への援用による、「人とももの」「人と場所」の関係分析に終わっていない点である。むしろ「分析」よりももっと手前の課題、つまり先行する他者の行為やその痕跡をなぞり（トレースし）行為を引き継ぐための、あくまでも具体的で切実な必要性に深く根ざした研究動機こそ独創的である。

論考中の記述例で言えば、屋根から外された瓦を受け取り、さらに下の者に引き渡すためには、自らその高さに立ち、作業を行うための足場を確保することが必要であり、瓦の形や重さを知ると同時に、それを他者に伝えなければならない。これらのことを先行する作業者の仕草から読み取り、同時に自らの所作で他者に伝える必要がある。自らの身体を内側から微分し、ひいては固執的な主体を複数化し、分解することであると思われる。それはあくまでも主体的な行為なのだが、同時に主体を解体する行為でもある。このような矛盾するプロセスを通じてしか、「行為者」は、「当事者」そして「共同者」の姿を「発見」することが出来ないのではないか。

昨今国内各地で盛んな「地域と美術」を巡る様々なプロジェクト。その中で「アーティスト」たちは、「共同者」（「協働者」）として召還され、「地域」における「当事者」と対置される主体的な存在として扱われる。そのような「地域」と「美術」、「当事者」と「共同者」の関係を前提として、有効な創造活動が行われ、その成果は皆で「共有」されるべきであるが、アーティストたちが桐生やその他の現場での活動を始めた時には想像もしなかった素早さで、このような文脈が流通し、共通認識として定着しつつあるように思える。その先で「当事者」や「共同者」の姿に出会うまでには、時間的にも空間的にも未踏の「距離」が、常に残されている。先の文脈で「アーティスト」が既に「共同者」として「地域」や「当事者」との対等な関係を前提として、そこから出発するのとは対照的である。その意味でも、本研究は論考・作品ともに、これまでもこれからも同種のプロジェクトを現場として作業を続ける先達、同時代者、後輩のアーティストやアート活動者にとって貴重な指針を示唆するものである。

ただの場所を共通の乗り物に変える想像力。古びた油のしみ込んだ床を、磨き洗い上げ、清潔な甲板に仕立てそこに乗り込む。「痕跡」を「航跡」にかえる、そんな身体と行為についての柔軟ながら力強い意思を伝える力作としての研究・論考・作品となった。

単なる機能的な成果主義に陥らず、永遠の課題としての場所と存在の関係性という歴史的・倫理的な基本問題に立ち返らせる研究として、審査員一同高い評価を与えた。